＜ 編 集 後 記 ＞

私が大型計算機や並列処理の業務に携わっていたのは，もう20年近く前のことになる。当時から大型計算機に関連した仕事と言えば，コンサバティブな手堅いシステムの典型イメージがあり，一方，並列コンピュータやそのソフトウェア開発と言えば，時代の最先端のイメージがあった。私は両方の仕事を同時に抱える時期もあったが，その場合には，発想や気持ちを全く切り替えてそれぞれの業務に当たっていた記憶がある。長い間これらの分野から遠ざかっていたが，ここ何年か，基盤センター関連の委員会に参加するようになり，皆さんのお話を伺っていると，いつのまにか，両方は一緒になって話の中に登場している時代になっていた。

当時，私の所属していた部署は，主に，現在の富士通の並列計算機の大本になるような並列計算機やそのアプリケーションの研究を行うプロジェクトと，当時勢いのあった，第5世代コンピュータの研究プロジェクトの2つが台頭していた。第5世代コンピュータと言っても，プロジェクト後半の時期になると，結局のところ並列計算機やそのソフトウェアの技術についての研究がほとんどであり，要するに，「並列処理」が毎日の業務のキーワードであった。その第5世代コンピュータプロジェクトのシンポジウムは毎年開催されていて，ある年のパネルディスカッションのクロージングの際，当時，並列オペレーティングシステム開発の総指揮を取っていた，現東京大学の某教授がこう語っていた。「これからは必ず並列処理の時代がくる。そして，20年後には多分，私はどこかの大学で教鞭をとっていて，その時，学生の前で，『昔はね，複数台コンピュータがあっても逐次に使っていたんだよ』と歴史を語ると，女子学生から『ウッソォー！　信じられなーい（←当時女子大生に流行っていた言い方），なんで同時に使わないのぉ？』と言われ，学生達みんなが笑う時代が来るに違いない。」

その時は単にユーモア溢れるまとめのお話だと思っていたが，現在，実際に彼が予測していたような状況になっており，基盤センターの活動を見守らせていただく中で，時の流れを痛感している。

（T.K.）